近代初期における民衆宗教の信仰形態について
—金光教テクスト『御道案内』を素材に—

川名　里奈

目　次

1．民衆の信仰形態
2．『御道案内』の概要
3．「伊原本」に展開された内容
4．結びにかえて—先行研究の省察—

1．民衆の信仰形態

日本の幕末維新期に創始された民衆宗教は、近代に入ると、それぞれの有する性格を、内的外的を問わず変容させていく。民衆宗教の担い手である民衆は、そのようななかで、どのような信仰形態を有していたのか。本稿で扱う、民衆宗教のひとつ金光教にも、このような問いが差し向けられる。

民衆宗教史の研究を振り返ると、その多くが、民衆の独自性を明示することに努力している。金光教に限っても、村上重良、安丸良夫、ひろたまさき、小沢浩らの先行研究がある。村上は、教祖赤沢文治（1814-1883）の思想に注目し、その「開明性」「合理性」を「明るい近代性」と謳い [村上1963]、明治期からの（教団による）天皇崇拝や（信徒による）現世利益信仰を反動的傾向とした [村上1963]。それに対して、安丸やひろたは、民衆思想を近代とは異なる地平のものとして扱う。安丸は、近世史における民衆の社会構

造や生活形態、「通俗道徳」とよばれる生活規範などを詳細に検討した [安丸1974]。ひろたも、安丸と同様に近世史的なアプローチから民衆を捉えようとし [ひろた1980、1983]、小沢は、安丸やひろたの研究を受けて教祖や教団論を展開している [小沢1988]。村上と安丸らとでは近代の把握が異なるが、いずれも、民衆思想は（時期的な意味での）近代において伸び悩んだと結論付けている。

上記の研究成果とは異なる研究視座を有するのが、桂島宣弘である。桂島は、民衆の独自性を抽出するのではなく、当時の宗教的、民俗的といった社会意識との関連や構造を捉えることから、問題点を明らかにしようとした [桂島1992、1]。また、このような視座のもとで、桂島は、教祖の自伝（『金光大神御覚書』『お知らせ事覚帳』）や金光教学の成果を用いて、教祖およびその周辺にあった信徒や彼の弟子に見受けられる民俗信仰を詳述している。着目された例を挙げると、教祖の自伝における、金神信仰や日や月への信仰、陰陽道にある神々の神性への言及や、また、教祖やその弟子たちの「祈祷者」的側面（「おいさみ」とよばれる神がかり的所作など）である。これらは、近代国民国家を形成した欧米列強に比肩し得ることを企図して、明治政府の掲げた「文明開化」において、「文明」に対して不合理な、呪術的なものとされた。民衆宗教が、こうした政策下で「淫祠邪教」視されて弾圧を受け、教義と組織を有する、「文明」の「宗教」(religion) に変容していくプロセスを把握し、それを教祖最晩年からの金光教の教団形成にも適応させている [桂島1992、1999]。

金光教を民俗信仰的な側面から把握した桂島の成果は、民衆の信仰形態を考える上で、示唆的である。こうした研究の流れで、興味深い例示をあたえるものが、金光教における最古の文書『御道案内』である。この史料は、桂島も、類型本の一部である「藤沢本」「伊原本」を扱い、言及している。

桂島は、「藤沢本」の内容が、民俗信仰的なものであるのに対し、「藤沢本」より後の成立の「伊原本」の内容に、「文明開化」との同一視を読み取れるとして、金光教における近代化の端緒の如く位置付けている [桂島1992、185-189；1999、54-57]。しかしながら、「伊原本」を再度検討すると、こうした

見解では当てはまらない内容が、展開されていることに気が付く。

以下、桂島による見解を踏まえて、『御道案内』およびその類型本「伊原本」を検討し、民衆の信仰形態のあり方に着目したい。

2.『御道案内』の概要

『御道案内』とは、どのような文脈のもとで執筆されたのであろうか。それを知るためには、このテクストの成立過程を見ていく必要がある。

作者初代白神新一郎[1]は、金光教祖の弟子であった人物である。岡山城下の米問屋の出自で、漢籍を中心とする教養の深い、インテリに属する地方商人のひとりである[2]。また、日頃から著述を好んでいた傾向がある[3]。

彼の入信契機は、自身の眼病および家庭内での不幸の連続であった。入信以前にも、地方霊山への登拝や山伏の補任の取得などの宗教活動を行っていたが、その途中に、教祖の教えを聴く機会を得て、入信する。1年後の1870（明治3）年の暮れ、岡山より西に30kmほどの大谷村（現、岡山県浅口郡金光町）の教祖のもとへ逗留中に、眼病が癒える奇跡を体験し、後に東京を拠点とした東方布教を目標に、その端緒として1875（明治8）年頃より大阪布教に着手する。そこで幾度かの挫折や官憲の弾圧を経験するなか、多数の信者を獲得し大きな成果を収めるが、当地にて病没する。

『御道案内』は以上のような信仰体験のなかで作成されていった。

写真1　初代白神新一郎　肖像
（『資料金光教近畿布教史』より転載）
〈金光教大阪教会所蔵〉

現存するテクストのなかで代表的なものとして、「藤沢本」「近藤本」、今回論じる「伊原本」が挙げられる。最古のテクストとされる「藤沢本」の成立時期は治病の奇跡を体験した直後の1871（明治4）年であり[4]、

写真２　『御道案内』最古のテキスト「藤沢本」の表紙及び序文
（初代白神新一郎　直筆）（『初代白神新一郎師』より転載）
〈金光教大阪教会所蔵〉

次の「近藤本」というテクストは大阪布教に着手したものの成果が上がらずに一時帰郷をしていた1876（明治９）年に成立したと考えられ[5]、作者晩年に著された「伊原本」については筆跡が作者自身ではないため内容からの推定であるが、官憲の弾圧が激化する1881（明治14）年と[6]、それぞれの成立時期から、作者の信仰体験のなかで最も大きなファクターによって執筆されたことがわかる。

『御道案内』のテクスト本[7]には、上記の「藤沢本」「近藤本」「伊原本」があり、「近藤本」以降は上中下巻に分かれ、「伊原本」が最も長編である。他には「藤沢本」を除く類型本も多く見られるが[8]、いずれのテクストも内容の骨子は変わらない。そのなかで、一貫して説かれているのは、「御道」の「広大無辺」さである。それは、日柄、方角や建築、出産などに関する旧習や俗信を、民衆の生活や精神を束縛しているものと判断し、どのようなことを行うにも「自由自在」とした教祖の精神とつながるものである。以下に、内容の主要な点をまとめる。

まず、「御道」の神への神観および神性への言及といった、教祖の宗教世界の理念的把握がみられる。教祖の宗教世界で中心となるものは「日天四（にってんし）」（日天子と同義、火の神格）「月天四（がってんし）」（月天子と同義、水の神格）「金神」

（土地に関連するところから土の神格）で、後の主宰神的な「天地金乃神」はこれらがもととなった神観である。そして最も重要な位置を占める「金神」に関しては、従来の祟り神としての懲罰的な神性を描く一方で、「善事には御柔和なる」恩恵をもたらす神性として表現される。

上記の内容以後、最終部までは、「御道」における信仰形態に関して述べている。どのような点が「広大無辺」であり「自由自在」であるのかを例示し、そこではどのような信仰形態であるのかを、旧習、俗信との関わり方から供物、家庭での神棚の祀り方に至るまで詳細に示してある。一例として、礼拝に関して「お祓をあげ、経巻を読誦することも気任せ」という記述がある。どのような例においても、従来の習慣にとらわれることのない「自由自在」というスタンスが貫かれている。「近藤本」になると、初代白神自身が布教現場に関わることにより、「寄進勧化」に現される布教者と信徒との金銭トラブルなど、実際の布教上で惹起された問題[9]に関して紙面の一部を割くようになるが、これらも「広大無辺」「自由自在」という「御道」のスタンスのもとに、信徒への金銭的圧迫の禁止といった対処がなされている。

内容の半数を占めるのが、信徒の御利益が描かれた「おかげ話」である。そこでも、「御道」の「自由自在」さは基礎となっており、例えば、とりわけ旧習や俗信に束縛されていた妊婦にまつわる安産の御利益の話も、触穢や食物、日柄、方角にまつわる禁忌などの否定に基づく話である。同時に、御利益は百姓や商工人の生活上に起きたもので、当時の民衆の卑近な日常生活を伝える。この「おかげ話」における民衆の姿は、次節でも述べるように、当時の民衆の信仰形態を知る契機となる。

初代白神が挙げた、このような信仰形態の「自由自在」さの事例には、現存する教祖の教えに関するテクストにも頻出しており、彼が理念的のみならず具体的に教祖の宗教世界を把握し得ていたことを明らかにしている。

以上のように、『御道案内』の内容は、当時の金光教における信仰形態の明確な現れであり、桂島が教祖およびその周辺に見出した民俗信仰的な要素に、まさに適合する部分である。ここから、桂島がなぜ「藤沢本」に民俗信仰的なものをみたのかが理解される。

それでは、次節より、本稿で問題としている「伊原本」のテクスト世界を、先行研究に照合しつつ、検討していきたい。

3.「伊原本」に展開された内容

> 文明開化御一新の御時に到り、此の御道も同然、旧習を廃止天地開闢以来世界一統第一大氏神 [金光教大阪教会1982、3]

上記の一文から本文が始まる「伊原本」をめぐる見解は、以下のようなものである。村上は、「伊原本」から派生したといわれる『御道嘶略記』における類似の一文から、政策への迎合または権力への付随と見なし [村上1963、184][(10)]、また桂島は、このような表現から「神の整序化」「一神教的傾斜」を見て取り、近代国民国家的「宗教」(religion) への趨勢であるとする [桂島1999、56]。

本節ではこのような、政策への迎合、近代宗教への趨勢という見解に関して、本文を読解することにより再考察を加えることを試みた。また、本論では、民衆の信仰形態がどのようなものであったのかに着目したい。

まず、近代宗教への趨勢という見解から考察をしていくことにする。前述の通り、桂島は「伊原本」の持つ性格を「一神教的傾斜」としたが、神観がそうであるとしたら、その神性も当然「一神教的傾斜」を示すことになるであろう。ところが、本文中には、神性に関するそのような内容の表現は見当たらないばかりか、「藤沢本」「近藤本」をほぼ継承したといってよい表現があらわれている。例えば、

> 日天四様の御陽気、月天四様の御潤い、金神様の御守りの御土地に住まひ、天地御三宝様の御恵み [金光教大阪教会1982、28]

という一文は、いずれのテクストにも登場しているが、日、月、金神いずれも独立した神性として見なしていることが明確であろう [桂島1992、143-

154][11]。事実、桂島が指摘しているように、教祖の自叙伝の中には、1873（明治６）年に「天地金乃神」という神名が確立した後も、その晩年に至るまで「日天四」「月天四」「金神」の神名が頻出しており、「存在としての神」よりも、むしろ「働きとしての神」を把握していた宗教活動が伺える [桂島1999、52][12]。このような神名および神性に関しては、上、中、下巻を通してあらゆる箇所に見られるため、神性のみならず神観も「一神教的傾斜」と見なすことはできない。

次に、政策への迎合という見解であるが、これは既述の「淫祠邪教」視の回避を意味しているといってよい。この「淫祠邪教」視というものは、「梓巫、市子、狐下ゲ等の禁止」という1873（明治６）年の教部省令に現れているように、政府の掲げる「文明開化」に反する宗教活動を指し、呪術的で近代文明からすれば不合理とされた旧習や迷信の類も含まれていた。そのために、旧来の民間信仰は政府の格好の弾圧対象となったわけである。

このような点をめぐって、「御規則同然」「御一新に同じ」という語句が頻出する「伊原本」にからは、どのように理解されるのであろうか[13]。

旧習や迷信という点では、「藤沢本」「近藤本」のスタンスと同様に、民衆の生活や精神を束縛すると考えられたものに関して、教祖と同じく批判の立場を取り、何事も「自由自在」とする。「御規則同然」という語句は、このような旧習や迷信への見解を示す文脈のなかで、頻繁に見られるのである。ここで、一例を挙げよう。

> 毎日結構なる日柄なるを、或は悪日杯と云うこと、勿体なき次第なり。是御規則同然なり。[金光教大阪教会1982、45]

この一文からは、前節で紹介した、日柄、方角などの旧習、俗信に対する教祖の精神に則したものが伺われる。この場合の「御規則」とは、政府がそれに深く結びついていた旧暦を廃止し新暦を導入したことである。このように、「御規則同然」の語句は、自らの宗教世界から維新政府の「御規則」を解釈しようとしたものであるといえる。もし政策への迎合であるとしたら、

宗教世界自体に何らかの変容が見られるはずである。しかし、本文中にはそうした変容は全く見られない。

さらに、実際の信徒たちの信仰形態をみると、政府の掲げる「文明開化」「近代宗教」の世界とは、全く異なる形態が明らかになる。それが抽出されるのが、前節で紹介した「おかげ話」と呼ばれる信徒の御利益の話である。多くが疾病治癒に関する御利益の話であり、当時の信徒がどのような信仰形態を有していたかがわかり、実に興味深い。例えば、治癒に至るプロセスに着目すると、信徒およびその周囲の者の回心という観念的な契機を有する例もみられるが、患部に御神酒を吹いたり、「金神」の神性の現われである「御土様」を塗布したりという、呪術的で具体的な治癒方途によるものが大半を占める(14)。これらはいうまでもなく、近代医学とは区別される、民間信仰による疾病治療の系譜をひくものであり、政府の標榜する「文明」「近代」からすれば明らかに不合理であると判断され「淫祠邪教」視と直結し、格好の弾圧の対象となるであろう。それゆえに、初代白神の宗教活動が官憲の弾圧の対象となったのである。

もし作者の初代白神が、幾分でも政策への迎合を、現実の宗教活動においてなしていたら、このような信仰形態を描くであろうか。つまり、実際の布教現場においては、民俗信仰的な信仰形態を踏襲していたといってよいのである。このように、「伊原本」も、「藤沢本」や「近藤本」と同様に民俗信仰的な側面を有していることが明らかである。

本節における分析を踏まえて、『御道案内』の主要な構成である神観、神性の理念的把握や具体的な信仰形態といった点から、「伊原本」を振り返っても、「藤沢本」や「近藤本」と異なることなく、従ってこれらの本にみられる宗教世界も保持されている。さらに、「御規則同然」などの語句への解釈も、このような宗教世界を表す文脈にみられることから、近代化という枠組みに当てはめることができないことがわかる。

以上から、「伊原本」は近代化の所産であるとはいえず、むしろ、桂島の注目した民俗信仰を有し、民衆の信仰形態が現れているテクストとして位置付けられる。

4．結びにかえて ―先行研究の省察―

『御道案内』「伊原本」には、「藤沢本」「近藤本」と違わず、桂島の着目した民俗信仰が展開されていることは、前節で述べたとおりである。

それならば、なぜ、これほどまでに民衆的地平が色濃く現れている「伊原本」の内容が採り上げられていないのであろうか。

この点をめぐって、冒頭で述べた先行研究を省察することにする。その過程を振り返ってみると、研究の視座や近代の把握が変容したが、そのなかで一貫しているのは、民衆／国家という二項対立的図式である。村上以降、従来の民衆宗教研究は、国家の掲げる近代と戦ってきた民衆の姿勢を明らかにしようとしてきた。これらの研究において抽出しようとされてきた民衆の姿勢は、このような対立構造をもとに、国家とは全く別の地平にある民衆の独自の世界におけるものとされている。

しかしながら、民衆はただ国家との対立のみに何らかの行動を起こすのであろうか。『御道案内』に展開されていた民衆の信仰形態からは、先行研究の描いてきたような戦闘的な民衆の姿勢はなく、その代わりに、疾病や職業上の問題など民衆のごくありふれた生活形態がそこにはあった。そもそも、宗教自体、貧、病、争に現される民衆の生活において惹起される問題を受けとめる存在として、民衆に受け入れられてきた。それを『御道案内』中の「おかげ話」は如実に現しているのである。

民衆にとっての宗教とは何か。彼らが国家と向き合う以前に、彼らにはそれぞれの生活形態なり信仰形態のあることを、『御道案内』「伊原本」は物語っているのである。また、近年の社会学を中心とした民衆研究において、例えばセルトーの民衆によるシステムの「受容と消費」論 [セルトー1987][15] がある。この論は、民衆と国家などのシステムとの関係を考える上で非常に有益であり、また、自らの宗教世界から政策を解釈した「伊原本」におけるスタンスは、ひとつの事例として考察すると興味深い。

『御道案内』は、今後、民衆宗教における信仰形態を検討する上で、史料としての重要な位置を占めるであろう。

【付記】

本稿で扱ったテクスト『御道案内』に関連して、2001（平成13）年５月から８月までの期間に、金光教教学研究所（岡山県浅口郡金光町）の所員各氏に、史料閲覧から関連事項のご講義に至るまで、貴重なご指導を多く賜りました。このような甚大なるご厚意のもとで本稿を脱稿できましたことに、心より感謝を申し上げます。

＜注＞

（１）初代白神の生涯および信仰体験については、[佐藤金造1923] および [金光教大阪教会1979] を参照。ちなみに1979（昭和54）年は、初代白神が本格的に大阪布教を開始した1879（明治12）年の100周年に相当する。また初代白神を思想的な面から位置付けようとしたものに、[和泉1923] がある。後の金光教団幹部に初代白神の弟子が多いためか、彼は教内で布教者のカリスマ的存在としての地位を確立した。

（２）金光教の草創期には、教祖による参拝者の住所、氏名、干支、年齢の控帳『願主歳書覚帳』（1860-1865）から、あらゆる身分の人物が、参詣したことがわかっており、武士や商人などインテリであったと考えられる身分の人物もいたとみられるが、初代白神はそうしたなかで、教祖の弟子として定着した者の一例として挙げられるであろう。

（３）初代白神の著述に、『商売心得書』『愚息信吉喩（さとし）の条々』などが伝わっている [佐藤金造1923、97-102]（ちなみに信吉は後の二代白神新一郎（1847-1910）で、教団幹部となる人物である）。当時の心学における教諭録のスタイルに類似しており、『御道案内』のスタイルにも酷似している。こうした著述能力も『御道案内』が短期に作成された背景であることは疑いない。その他にも何冊かあることが、『資料金光教近畿布教史』に初代白神の遺筆として掲載されている写真の一例からわかる。

（４）「藤沢本」やそれ以外のほとんどにテクストに、序文の末尾に「明治四年晩春白神新一郎」との署名があり（ない場合は、署名欠落のパターンのみ）、また「藤沢本」の表紙に「下書」と書いてあることからも（写真2参照）、この年代

であると考えられる。

（5）「近藤本」の成立年代は、初代白神と関係の深かった大喜田喜三郎 (1851-1917) の写本による「近藤本」の類型本『天地開発御道』上、中、下巻いずれの署名欄にも「明治九年晩秋再撰ス」とあるところから推察した。この類型本は、「近藤本」に最も沿っているテクストであり、年代の信憑性も高いと考えられる。なお、『天地開発御道』は2001（平成13）年７月の金光教教学研究所内での閲覧において初めて解読をさせていただいた史料である。

（6）[福嶋1963、148] においては、「伊原本」は、最晩年の初代白神の口述を四男葵勝吉が筆写したもので、表紙に記載された勝吉の干支、寅が根拠であるとする。しかし、「初代白神先生年表」[佐藤昇編1982、21-32] によれば、当該人物は10数年前に夭折しており、また葵姓を名乗ったのは八男勝之助子年生まれのみであるので、当該人物が誰であるのかは不明である。また [福嶋1963] は、『御道案内』を単独に扱いテクストの概説した論文としては、現在に至るまで唯一のものであり、初代白神の信仰および布教の軌跡をもとに論じている。

（7）『御道案内』の各テクストの概略を示す。「藤沢本」は、かつて岡山県総社市で金光教教師職にあった藤沢家から1950（昭和25）年頃に発見され、大阪教会に寄贈され、また1983（昭和58）年版『金光教教典』収録の『御道案内』の底本となった。「近藤本」は、初代白神の弟子近藤藤守（1855-1917）の所蔵を近藤の弟子井上定次郎（1889-1964）（元桃山教会長）が譲り受け、桃山教会の所蔵となった。「伊原本」は、1913（大正２）年に初代白神の五女伊原小松が大阪教会に寄贈したものである。

（8）『御道案内』各テクストの類型本は、「初代白神新一郎『御道案内』について」[福嶋1963] に整理されており、その時点では「近藤本」の類型本が２本、「伊原本」の類型本が３本であったが、それ以降も類型本が発見され、金光教教学研究所によって複写による収集が続けられており、筆者が2001（平成13）年７月に当所にて閲覧させていただいた際には、上記の他に「近藤本」の類型本が８本、「伊原本」の類型本が１本所蔵されていた。初代白神の弟子で教団幹部であった、近藤藤守の弟子たちの教会からの発見が最も多く、『御道案内』の波及を考える上で興味深い。

(9) [佐藤光俊1978、65-66]において、「非合法で未統一な布教事態」の一連としてこの点を指摘している。

(10) 『御道嘶略記』は、初代白神が晩年にあたって、丹波の葦田道之助（後に京都で布教）に『御道案内』の要所を簡略に書記したものといわれる [佐藤昇編1982、289]。このテクストの底本は、本文の内容や語句から「伊原本」であることが推察される。また、「無拠御召捕、御連越に相成る時、親兄弟妻子憂き歎き悲しむとても叶わず、罪科も軽重を以って行われ、罰金で済むもあり」[金光教大阪教会1982、166] は、官憲の弾圧に遭遇し釈放されるまでの、実際起きた状況を記していると考えられ、興味深い一文である。現在は、[金光教大阪教会1982] に収録されている。

(11) また、この論考の基礎となった「日天四」「月天四」の神性に関する論文として、岩本徳雄　1978「日天四と金光大神」(『金光教学』18号　金光教教学研究所）などがある。参考までに、「日天四」「月天四」という表記は、教祖が、4という数字を避けた当時の慣習に反する意味を込めたものといわれる。

(12) 「存在」：神格に対しての「働き」：神性という意味合いで用いられている。また、「存在としての神」は、西洋におけるGodを意識したものである。ちなみに、「働きとしての神」という神観は、金光教において、現在に至るまで最も重んじられている教理である。

(13) この点をめぐる桂島以外の論考として、[渡辺1993、27-34] があり、「伊原本」に主張されている内容は、「御一新」や「御仁政」の概念をアナロジーとして用いることによって、明治政府の国家秩序構想とは異質な「神代」を描いていると論じている。

(14) 御神酒を用いる信仰形態は、現在でも続いているところがある。また、御土を用いる信仰形態は、戦後まで続いたという口碑が残っている。

(15) 端的にいえば、支配的な「生産」システムを「消費者」がいかに「消費」してきたかを論じたものである。今後さらに深めていく必要のある視座である。また、「民衆」研究に関する他の代表的な論考に、セルトー　1990『文化の政治学』(山田登世子訳　岩波書店）やブルデュー　1991『構造と実践』(石崎晴己訳　藤原書店）などがある。

＜主要文献・参考文献＞

初代白神新一郎　1871『御道案内』「藤沢本」（金光教本部教庁1983『金光教教典』所収）

初代白神新一郎　1876頃『御道案内』「近藤本」（金光教教学研究所　複写、解読本所蔵）

初代白神新一郎　1881頃『御道案内』「伊原本」（金光教大阪教会1982『御道案内』所収）

村上　重良　1963『近代民衆宗教史の研究』法蔵館

安丸　良夫　1974『日本の近代化と民衆思想』青木書店

ひろたまさき　1980『文明開化と民衆意識』青木書店

小沢　　浩　1988『生き神の思想史―日本の近代化と民衆宗教―』岩波書店

桂島　宣弘　1992『幕末民衆思想の研究』文理閣

桂島　宣弘　1999『思想史の19世紀―“他者”としての徳川日本―』ぺりかん社

「大阪布教百年」編集スタッフ編　1979『大阪布教百年』金光教大阪教会

初代白神先生百年祭委員会編　1982『御道案内』金光教大阪教会

金光教本部教庁編　1983『金光教教典』金光教本部教庁

金光教近畿布教史編纂委員会編　1991『資料金光教近畿布教史』金光教近畿布教史編纂委員会

金光教本部教庁編　1994『金光教教典　人物誌』金光教本部教庁

金光教本部教庁編　2001『金光教教典　用語辞典』金光教本部教庁

佐藤　金造　1923「初代白神新一郎師」『金光教祖と初代白神』初代白神先生追慕記念会

佐藤　昇編　1982『初代白神新一郎師』金光教徒社

福嶋真喜一　1963「初代白神新一郎『御道案内』について」『金光教学』6号　金光教教学研究所

佐藤　光俊　1978「擬態としての組織化―神道金光教会設立とその結収運動―」『金光教学』18号　金光教教学研究所

渡辺　順一　1993「天地の規範と生神の道伝え―『覚帳』の向明神、白神についての

記述内容をめぐって—」『金光教学』33号　金光教教学研究所
ミシェル・ド・セルトー　1987『日常的実践のポイエティーク』（山田登世子訳）国文社